

# 日々の観察者

Observers of Everyday Life

2020.10.24 Sat — 2021.1.10 Sun 11:00-21:00

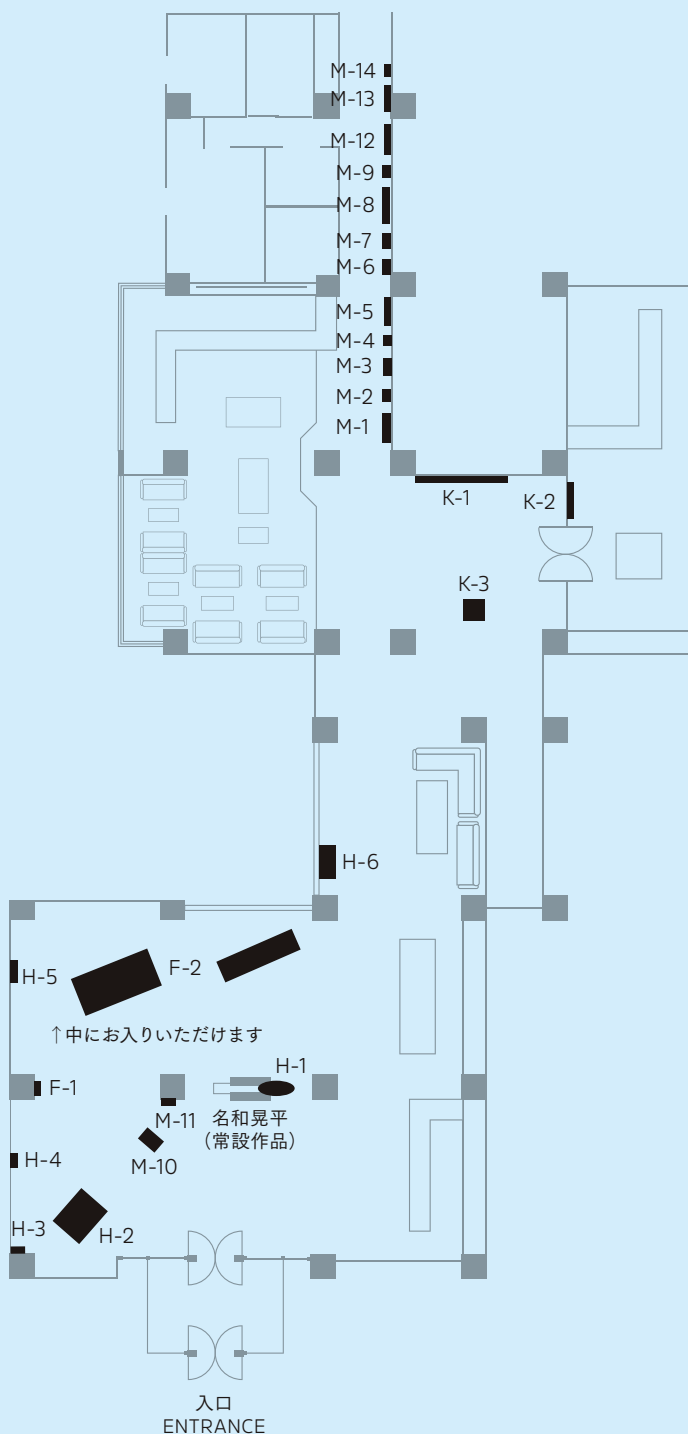
HOTEL ANTEROOM KYOTO | Gallery 9.5

小出麻代 | KOIDE Mayo

花岡伸宏 | HANAOKA Nobuhiro

藤野裕美子 | FUJINO Yumiko

松元 悠 | MATSUMOTO Haruka



## 鑑賞時のお願い

- ・作品にはお手を触れないようにお願いします。
- ・撮影は可能ですが、フラッシュや三脚のご利用はご遠慮ください。

京都精華大学は企画展「<sup>にち</sup>日日の観察者」を開催します。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、  
これまでの日常が覆された今、あらためて自分自身と向き合い、  
日々の暮らしを見つめ直す時間が増えた人も多いでしょう。  
本展では、「日常」や「暮らし」をキーワードに、  
本学出身アーティストの中から、

日々のささやかな出来事や人々の暮らしを観察し、  
独自の思考と手法で新たな風景を生み出す4名の作家、  
小出麻代、花岡伸宏、藤野裕美子、松元悠を紹介します。  
時代の大きな転換期にいる作家たちが向き合った  
日々の観察を作品をとらえてご体感いただけたら幸いです。

展覧会 Instagram アカウント (@nichinichi\_no\_kansatsusha) で  
作家たちが同じ日時に観察した光景を定期的に更新しています。  
よろしければ以下のQRコードよりご覧ください。



## 花岡伸宏

HANAOKA Nobuhiro

- H-1 《衣服、手、木材》2020年 木、衣服、アクリル絵具、鉛筆
- H-2 《無題(畳、頭部)》2018年 木、鉄、畳、衣服、アクリル絵具、鉛筆
- H-3 《畳》2020年 ブロンズ、油粘土
- H-4 《手、編み物、折れ》2020年 木、キャンバス、油粘土、編み物、鉛筆
- H-5 《無題(衣服、キャンバス)》2016年 木、キャンバス、衣服、油絵具、鉛筆
- H-6 《無題(テレビ台、衣服)》2020年  
木、テレビ台、衣服、キャンバス、アクリル絵具、鉛筆

### STATEMENT

つくるということ。

それは生活の延長線上にある“彫刻する”という行為であり、また、それは私にとって個と最大に向き合うことのできる優れた遊びのようなものでもあります。

### PROFILE

1980年広島県生まれ。2006年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了(立体造形)。主な個展に「つくるということ」(大阪府立江之子島文化芸術創造センター、大阪、2020)、「入念なすれ違い」(MORI YU GALLERY KYOTO、京都、2017)、グループ展に「六本木クロッシング2019: つないでみる」(森美術館、東京、2019)、「東アジア文化都市2017京都 アジア回廊現代美術展」(二条城、京都、2017)など。

## 藤野裕美子

FUJINO Yumiko

- F-1 《九条の交差》2020年 岩絵具、水干絵具、麻紙、木製パネル
- F-2 《ちくはぐな接点》2020年 岩絵具、水干絵具、胡粉、染型、麻紙、木製枠

### STATEMENT

岩絵具、麻紙などの日本画材を用いて絵画を制作し、会場での展示形態を含めて作品を制作しています。

画面の中を、あらゆる場所で見たものを継ぎ接ぐようにして構成し、実在するものを用いて、実際にはない空間を作っています。

主に空家の中や過疎の地域、街中の一角で見つけたものや、人の手を離れた家財道具など暮らしの「過去」を象徴するものと、生育によって日々更新され「現在」を象徴するもの、時に「過去」を風化しようとするものとして植物などの自然を描いています。

それら「過去」と「現在」が混在し、それぞれの時点・地点が繋がり合うかのように描こうとしています。

ほとんどの作品に見られる「カーテン」や「窓枠」は内と外の関係や、それらが崩壊している状態を表すものとして描いています。

それらの絵画を、任意の角度から見つめていただけるように、壁面から自立させて展示しています。

絵画の間にある隙間(菱形の中央)や、構造物を介して、絵画の外側にあるこの場所の風景や鑑賞している人の気配が感じられるようにしています。絵画のある空間を巡りながら、誰かが絵画と相対するその時、画面の中に巡る時間がさらに外側と繋がることをイメージして空間の構築を試みています。

### PROFILE

1988年滋賀県生まれ。2013年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了(日本画)。主な個展に「過去の滞在/藤野裕美子 個展」(Gallery Den mym、京都、2020)、「背面の景色/藤野裕美子 個展」(尾賀商店、滋賀、2015)、グループ展に「滋賀近美アーツスポットプロジェクトVol.3 エンドレス・ミトス」(滋賀、2020)、「瀬戸内国際芸術祭2019/高見島プロジェクト」(香川、2019)など。

## 小出麻代

KOIDE Mayo

- K-1 《別の言葉で(氷とコップ)》2020年 サイアノタイプ、写真、太陽光
- K-2 《別の言葉で(カーテンと窓)》2020年 映像 7分12秒
- K-3 《別の言葉で(拾い物と影)》2020年  
葉っぱ、枝、凸レンズ、針金、モーター、コップ

### STATEMENT

展覧会の話を受けたのは、たしか4月初旬頃のことだ。参加の意向を即答したものの、本当に開催できるのか誰にも分からず時間だけが過ぎていく間、展覧会のキーワードとして挙がっていた「日常」という言葉だけが重く響いた。大きなことが起きたときに、小さなことやものに意識を没入することでバランスを取ろうとしてしまう私は、次々と流れる情報や、それに呼応するように日々変化していく様々なことの隙間で、対象を見つけては立ち止まり、ひたすらに眺めた。コップの中の氷、風に揺れるカーテン、暮れていく一日、景色、季節、いつの間にか姿・形が変わっているように思いこんでいたものと意識的に呼吸を合わせることで、そこに流れる時間を確かめた。小さな確認をし続けることが、私にとっての「日常」という言葉の一部になった。

3つの作品は、小さな確認を続けた「日常」の記録の延長線上にある。どんな言葉を付け足せば、今の「日常」に辿りつけるだろう。

「取り戻す」という言葉は、もうしっかりこないけれど、「新しい」という言葉でもない。なにか別の言葉を探している。

### PROFILE

1983年大阪府生まれ。2009年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了(版画)。主な個展に「形代-かたしろ」(オーエヤマ・アートサイト、八木酒造、京都、2020)、「うつしがたり」(枚方市立御殿山生涯学習美術センター、大阪、2019)、グループ展に「生業・ふるまい・チューニング 小出麻代-越野潤」(京都芸術センター、京都、2018)など。アーティスト・イン・レジデンスに「END OF SUMMER 2018」(YaleUnion、ポートランド、アメリカ、2018)。

## 松元 悠

MATSUMOTO Haruka

《在る碑(黒鳥山公園)》2020年

### 1 「遺る碑」

M-1 碑の配置図 アルミ板リトグラフ、いづみ紙

M-2 小栗勉『史伝小説 聳ゆるマスト』かもがわ出版(2016年に絶版)書籍

M-3 聖徳記念絵画館『四十七 岩倉邸行幸』プリント、紙

M-4 修土館の入り口に掲げられる桜の紋章  
コラガラス、BFK紙、木製プレート

### 2 「お母さんの碑」

M-5 碑の配置図 アルミ板リトグラフ、いづみ紙

M-6 H氏のコラム インクジェットプリント、転写シート

M-7 松元ミキコによる手記 油性ボールペン、リサーチノート

M-8 碑をキザむ(黒鳥山公園) アルミ板リトグラフ、BFK紙

M-9 コンクリートの円 ダーマトグラフ、紙

M-10 コンクリートの円 石版

M-11 コンクリートの円のタペストリー 石版リトグラフ、糸、布

### 3 「無名の碑」

M-12 碑の配置図 アルミ板リトグラフ、いづみ紙

M-13 2014年11月06日に大阪府和泉市で発見された  
約60歳前後位の女性行旅死亡人の情報  
アルミ板リトグラフ、布

M-14 黒鳥山公園駐車場北東側休憩所 写真

## STATEMENT

マス・メディアが報じるニュースを取り上げ、当事者に関係する土地を訪れる。メディアの向こう側に存在するおおよそ出会うことのないだろう、当事者が見ていた景色にピントを合わせ、傍観者のひとりに過ぎない立場からみえた景色を再構成する。

遺される碑は、今ここにいる人間にむけてメッセージを発する生きた痕跡として存在している。

戦争、不当な裁判を受け戦うお母さんの行為、人知れず現れた身元不明の頭蓋骨。

工事が進む黒鳥山公園に在る人々の碑をたどり、遺されるものを提示する。

## PROFILE

1993年京都府生まれ。2015年京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画コース卒業。2018年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画修了。近年の主な個展に「独活の因縁」(MEDEL GALLERY SHU、東京、2020)、「活蟹に蓋」(三菱一号館美術館、東京、2019)、グループ展に「HER/HISTORY」(岸和田市立自泉会館、大阪、2020)、「Kyoto Art for Tomorrow 2020 一京都府新鋭選抜展一」(京都文化博物館、京都、2020)など。

## アーティスト・インタビュー

### 花岡伸宏

——花岡さんに出品をご依頼する段階では、本展のキーワード、「日常」や「暮らし」に関連したモチーフとして、衣服を用いた作品に興味を持っていました。ただその時にすでに関心は「量」に移っていると言っていましたね。木、衣服、畳、キャンバス等の花岡さんが選んでいるモチーフには一貫性を感じますが、それ自体に何か記号的な意味があるわけではなく、(WEB上のインタビュー<sup>\*1</sup>にもあったように)「その素材が自分と信頼関係を結べている」かどうかが重要なのでしょうか？

そうですね。信頼関係はとても重要で、例えば新しく完成した直後の作品は自分で評価しようとしてもそれが良いものなのか悪いものなのかということその瞬間には判断しにくいものです。自分の生活の中で何度も繰り返しその作品と対峙し、時間をかけて判断していくことが重要になってきます。僕はそれを信頼関係と呼んでいます。そして、作品となる材料もこれと同様に時間をかけて判断することが多いように思います。もちろん制作する中で即興的につくこともあるので、一概には言えません。

——《衣服、手、木材》は、アンテールーム京都の象徴的な存在である名和晃平さんの常設作品に寄り添うように展示されています。この名和さんの作品のテーマが「ものの表皮」であるとホテルの方から聞いて、花岡さんが衣服を用いて構成している点も興味深いと思いました。本作はどういったことを考えて制作したのですか？

そもそも名和晃平さんのこの作品(《Swell-Deer》&《Swell-Tiger》)はアンテールーム京都の象徴的なものとして恒久設置されていて、いわゆる寺社仏閣の入り口にある仁王像や狛犬の様な存在であると僕は思っています。しかしながら、このスペースはギャラリーとしても機能していて、展示する側であり美術を志す若者には企画の段階でこの仁王像を含めた空間構成を強いられることとなります。名和晃平さんは彫刻家として第一線で活躍されている傍ら美術大学での指導も行なわれており、ある意味これは美術を志す若者に対しての鞭のようなものだと思っています。

また、名和晃平さんのこの作品が、内側から増殖する細胞を想起させる素材として発泡ウレタンを使用していることから、それに対比させて、細胞の集合体である人体の抜け殻としての衣服を素材にして何かできないだろうか？ 仁王像や狛犬の阿吽の関係性(始まりと終わり、入口と出口)を持たせてみてはどうだろうか？ などと考えながら制作してみました。

——今回、ギャラリー空間を二分した藤野さんの作品には、角材を用いて立体的に展示構成している点など、素材の共通点もあるし、大黒天のお面や、置物の白鳥、狸等といったモチーフ選びにみられるユーモアも、花岡さんの作品と親和性があるかなと思っていました。実際に展示してみてもいいか？

藤野さんの作品には平面性と立体性の問題があり、日本画の平面作品として成立しているものをあえて構造化し、三次元の物質、物体、裏表のある存在として展示を試みている部分に自分との共通点を感じました。

また、素材も木材を使用しており仮設的に表現を行っていたという点においても、親和性があるように感じられたのかもしれないですね。自分としても違和感がなかったので展示し易かったです。彼女が制作する中で、平面から立体へと変化していった経緯についても聞いてみたいところです。

\*1 Webマガジン「AMeeT」『「作る」という行為に流れる時間を可視化する彫刻』後半(2020.09.16) <https://www.ameet.jp/feature/3091/>

## 藤野裕美子

——近年の作品は展示会場が古民家や古い建物であることが多く、展示空間の場所性も強く印象に残っています。今回は、完全なホワイトキューブという訳ではありませんが、いわゆるギャラリーですし、画面に描かれているモチーフそれぞれに集中して観られる良さも感じました。今回、《ちぐはぐな接点》というタイトルにして一つのインスタレーションとして構成した理由はどうしてでしょう？

菱形の作品（表裏）と、長方形の作品（表裏）は、制作したタイミングが少しずつ異なります。しかし、バラバラのモチーフを一つの画面上につなぎ合わせているように、それぞれの画面も不完全ながら接点があると考えています。緩やかにつながるそれぞれの次元を、空間を往来しながら見つめて欲しい思いから、二箇所に切り離しながら一つのタイトルにしました。また、絵画の間にある隙間（菱形の中央）や構造物を介して、絵画の外側にあるホテルの景色や鑑賞している人の気配が感じられるようにしています。ホテルという空間は美術館とは異なり、様々な目的の人が日夜往来する場所です。作品には気を留めない方もおられるかもしれません。ですがこの絵画空間をただ人が歩くだけでも、私は何か意味が成立するような気がしています。

——今回の新作《九条の交差》は、アンテールーム周辺を散策して見つけたモチーフが描かれているんですよね？

京都駅付近は何度も訪れている場所ですが、アンテールームのある九条の界隈は自身にとっては新鮮で、古い住宅街などを散策してみました。モチーフを探そうという意識はなく、何となく歩いていただけなのですが、交差点にある個人宅の前の鉢植えに異国感のある見慣れない植物がいくつも茂っているのが気になりました。それらから家主の趣味が伺えるようでした。植物と、別の場所で見つけた薄くなった花柄のカーテンを重ねて描きました。植物と閉ざされた家の中にあったカーテン、異なった二つの次元を交差させ、どこでもない場所と時間軸を絵画の中に成立させようとしています。

——展示設営の終盤、花岡さんと話し合いながら、お互いの展示エリアに踏み込んで展示を検討していたのは楽しい時間でした。今回、隣り合って展示してみてもいかがでしたか？

学生時代に彫刻がご飯に刺さっている花岡さんの作品を見てギョッとしたことをよく覚えています。よく使う道具の持ち手のすり減り、液晶に付く手垢、ご飯粒のついた衣服など生活の中で起こる「変化の痕跡」も彫刻として捉えておられることはとても興味深く、日々の観察者Instagramの花岡さんの写真、「箸の先」が二度も出てきたことも何だか納得がいきました。恐れ多くも、花岡さんと空間を共有することに対して全く心配はなく、設営当日まで楽しみにしていました。絵画ベースの私の作品が空間に立ち上がり（F-2）、彫刻ベースの花岡さんが壁面を使用した展示をしている（H-4、H-5）エリアが生まれたことを面白く感じています。誰かの生活が刻まれたものとしての日用品などと、それらに変化を与えていく植物などの自然を重ね合わせる私。自らの手によって変化を与えた木材（彫刻）と、生活の中で生まれてくる姿形を重ねる花岡さん。共通するモチーフや素材など視覚的な共通点の奥にあることについて会期中に考えたいと思っています。

## 小出麻代

——《別の言葉で（氷とコップ）》は、見る方向にもよりますが、コップの中の氷が溶けていく様子が逆再生されているかのようで、時間性を感じさせる作品です。パネルのそれぞれの青色の濃淡に差があるのが気になりますが、サイアノタイプがどういった技法なのかも含めて、どのように作られているのか教えてもらえますか？

この作品は、コップに入れた氷が溶けて水になるまでを写真撮影し、その写真を原稿にして、感光紙（今回は布）の上に重ね、露光したものです。サイアノタイプとは、鉄塩の化学反応を利用した写真技法で、光の明暗が青色の濃淡として、そのまま画面に定着します。青色の濃淡に差があるのは、人工的な光を当てるのではなく、太陽光を利用している為です。焼き付けた日時や紫外線量の差が、色の違いとなり画面に現れています。

——《別の言葉で（カーテンと窓）》は、夏にアンテールームに滞在して客室で撮影した映像作品ですね。展覧会への出品について相談した頃に、映像に興味を持ち始めているという話を聞いたのをよく覚えています。その理由はこういったところにありますか？

カメラを使って追いかけているのは、ある対象物が、光や影、風などの影響を受け、変化していく様子です。それらは、これまで制作してきた作品の中でも取り入れている要素で、自分で人工的に作っている場合もありますが、窓があるような展示空間においては自然と現れる為、そのまま素材として利用していることも多く、いつでも観ることができるとは限りません。そして、たとえずっと会場に現れていたとしても、ささやかな現象・変化である為、全く気づかれないこともあります。

映像に興味が出てきたのは、そういった現象・変化を私の視線が捉えた時とかなり近い状態のまま、他者にいつでも指し示すことができる方法であると気づいたからだと思います。意識としては映像作品を作っているというよりも、展示方法も含めてインスタレーション作品の一部を作っている、全体の一部として自分の映像を捉えている方が強いように思います。映像内では時間軸を変えることができるということも、興味のひとつとしてあるのかも知れません。

——《別の言葉で（拾い物と影）》は、小出さんの作品によく登場するモーターで動く回転するオブジェで、秋を感じさせる葉っぱと枝から生みだされる影も印象的です。他の二点を含めて今回の三点の作品は、ステイトメントにも書いていたように、「小さな確認を続けた『日常』の記録」であり、今のこの状況だからこそ生まれた作品だと思っています。会場に実際に展示してみて改めて感じたこと、見えたことはありますか？

今回の作品は三点ともに、「時間」のことを思いながら制作しました。これまでも「時間」をテーマに制作した作品はいくつかありましたが、その時の「時間」というのは、「過去」や「歴史」といった、かなり長い時間のことを指していました。今回は、例えば、ある一日とか、一時間、一分、一秒、といった自分が今、過ごしている日常の中の時間のことをそれぞれの作品を通して考えようとしています。この作品《別の言葉で（拾い物と影）》は、季節を「秋」と限定しているわけではありませんが、他の二つの作品よりは少し長い時間（期間とも言えるかもしれません）のことを思いながら制作した作品です。

展示をしたばかりなので、まだ作品を反芻するまでには至っていませんが、展覧会が終わる頃には、何か掴めているといいなと思います。

## 松元 悠

——松元さんの作品を深く知る前は、人の日常や生活が描かれている作品だと思っていたのですが、作品制作の背景や方法を聞いて、大変驚きました。《在る碑（黒鳥山公園）》は「遺る碑」、「お母さんの碑」、「無名の碑」という三つの作品から構成され、それぞれに松元さんが綿密に調査し、設定している物語が存在しますよね。まず、「遺る碑」について教えてもらえますか？

「遺る碑」とは、言葉の通り黒鳥山公園にのこる「天皇駐蹕碑」「信太山忠霊塔」「阪口喜一郎顕彰碑」という、三つの石碑のことを表しています。各々が異なる立場から戦争の歴史を世に知らしめるもので、それらの出来事は今でも絵画や書籍、歴史資料館などで知ることができます。

——「お母さんの碑」は実際にテレビ番組でも取り上げられた事実がベースになっていると聞きました。

「探偵ナイトスクープ」というテレビ番組で、“亡き娘の足跡を持ち帰りたい”という大阪市の女性の依頼から、生前に黒鳥山公園で舗装してすぐの道を歩いてしまったという娘の足跡がついた箇所を円形にくりぬいて取り出すという映像を見ました。

依頼者の娘さんは飲酒運転の車によってひかれたことが亡くなった原因でした。番組視聴後に事故について調べると、加害者への判決は非常に軽いものだったということが判りました。H氏のコラムに傍聴に行った際の裁判時の状況が記されており、拝読中にも当時の様子が頭に浮かびました。私自身、同じ場所で似たような違和感を感じる場面に遭遇したこともあり、当事者のことを思うと無念でなりませんでした。結果的にこの事件は番組がきっかけとなり再び浮上し、私を含めた多くの視聴者に爪痕を残しました。不当な裁判に終わったものの、長寿番組というメディアの力を借りて事件を事件の中で終わらせない母親の戦う姿が浮かびました。

現在、足跡がくり抜かれた円形の跡には新しいコンクリートが注がれ埋められています。その痕跡を“母が戦った記録”としてフロタージュを用いて採取し、いつまでも刷り取ることができる石版へ転写しました。

——「無名の碑」はステイトメントには、「人知れず現れた身元不明の頭蓋骨」とありますが…。本件に着目した理由はこういったところにありますか？

戦争で亡くなった軍人、軍属らの約1560人の骨壺と1400を超える位牌が納められる信太山忠霊塔、反戦を訴え続けた阪口喜一郎を顕彰する石碑、母親にとってかけがえのない存在となった足跡など、遺されたものにとって抛り所となるような要素が各所に点在する公園に『【大阪・和泉市】黒鳥山公園の遊歩道で、人の頭蓋骨が見つかる』という記事を見つけた時は、一連の流れと明らかに対照的な出来事だと衝撃を受けました。2014年12月3日の官報で行旅死亡人として掲載された彼女にどのような背景があるのかはわかりませんが、この場所に置いていった人間がいることを思うと、どうしてもこの土地との関連性があるようで、これも現代に起こっている“何か”を伝える碑なのではないかと考えました。

最後に展示全体について説明しておこうと思います。《在る碑（黒鳥山公園）》は、遺っていくものとそうでないものをテーマに制作しました。コンクリートの円がある場所は現在大規模工事の真っ只中で、現場観察に行った時にはたくさんのユンボ（ショベルカー）が並んでいました。阪口を題材に出された書籍『史伝小説 聳ゆるマスト』は2016年に絶版していて信太山忠霊塔は耐震性の問題で撤去される可能性も出はじめています。<sup>\*1</sup>

一方、天皇駐蹕碑は一番高台にあるものの木が生い茂ってその存在自体が見えなくなってしまっていました。そこにあるのに、「出来事を知らない人にとっての記録」として意味を成せないこともあります。今遺っているものはなにか。次の世の中に向けて遺すものはなにか。作品を作るうえで自分自身も<sup>ふるい</sup>篩にかけながら模索しているところです。

\*1 武田肇「旧陸海軍の墓地、どう保存 進む劣化・損傷、でも国は…」朝日新聞DIGITAL, 2020年6月24日(最終閲覧日:2020年11月1日)

## 作家から作家への質問リレー

### 花岡 → 藤野

花岡 藤野さんの今回の作品は平面性と立体性、二つの要素を持ち合わせており、もともと大学で日本画を専攻されていた点に於いても、何故このような作品形態になったのかということが作品を初めて見た時から気になっていました。本来なら平面作品としても充分成立していたであろう絵画の支持体をあえて木材の骨組みで三次元化し作品に鑑賞者が回り込めるような展示方法をとった経緯について少し聞かせていただけないでしょうか？

藤野 日本に美術館という制度が入る以前は、日本美術は城や寺社の障壁画や襖などとして、また、茶文化などの中で、衣食住や人の営みとともにあるものでした。壁に掛かった絵を正面から見るという鑑賞の姿勢は日本美術の歴史上比較的最近のことではないかと思えます。歩き回ったり、座ったり、生活を伴いながらふと側にあった当時の絵の見え方は、向き合う角度のみならず、日の移ろいや、季節などによって常に変化しているものであったと想像します。そうした変化をあえて現代空間でもたせないかと構造物に取り付けて絵画自らに角度を持たせています。きっかけは初めて和室に展示した2013年の瀬戸内国際芸術祭でした。床に絵を置いてみたところ、自然光や周辺環境の影響をダイレクトに受けて、同じ状態で見るということができない状況に最初は違和感を感じました。しかし美術館で見る時よりも岩絵具の色彩が生き生きと起き立っている印象を受け、先人が見てきた日本絵画はこういうものだったのかもしれないと感じました。それから、展示する環境によってあらゆる形態を試しながら、見る人が任意の位置から絵画と相対できる空間を作ろうと試みています。

花岡 返答ありがとうございます。日本画からの離脱を試みる作品と思っていましたが、逆でしたね。聞いて良かったです。

### 藤野 → 小出

藤野 小さな頃は、もっと時間がゆっくりで、周りのものはもっと大きく感じられ、世界は不思議で真新しいものでした。地面は何時間でも見つめられる対象で、虫も植物も砂も小石も一秒おきに新しいものが見つかり、それは喜びの連続でした。そうした感覚を小出さんの作品は呼び覚ましてくれます。私は小さな頃、親戚や友達の「家」はどうも心が躍り、自分の家にはないモノを見つけたり、その家での自分のお気に入りの場所を作ったりしては、必ずそれを触ったり、確かめたりするのが好きでした。意識的にしていた訳ではないのですが、最近やっとそういえば昔もこんな感じだったな、と変わらない自分に気がつきました(笑)。

小出さんの小さな頃に好きだったこと(遊びでも歌でも本でも)、それらが今に繋がるようなこと(逆に繋がらないことでも)があれば聞かせてください。

小出 藤野さん、こんにちは。質問ありがとうございます。小さな頃のことを思い返してみると、友達と遊ぶことよりも、一人で過ごすことの方が好きな子供でした。活発でもなかったのも、基本的にはインドア派で、家の中で、本を読んだり、窓から見える景色をぼーっと眺めたりして過ごしていました。その頃に見ていた景色については、以前に文章を書かせてもらったことがあるので、そちらで読んで頂くとして、(参照：小出麻代ホームページ mayokoide.net <BIBLIOGRAPHY> TEXT-ピカピカのアンテナ) 今回は、好んで読んでいた本について少し書いてみようと思います。本はよく買ってもらったのも、色々読んでいたのですが、中でも「こまったさん」シリーズ、「おぼけのあっち、こっち、そっち」シリーズ、「11びきのねこ」シリーズ、が好きでした。三つのシリーズ共に、食べ物のお話が出てくるので、美味しそうだなと思ったりしながら読んでいたのかな、と思い返すのですが、おそらく好きだった一番の理由は、それぞれの本に出てくる主人公(達)が、日常の延長にある少し変わった世界にいつの間にか足を踏み入れていたことだと思います。

その「旅」が、自分にとっては少し恐ろしいことであると同時に、憧れでもあって、好んで読んでいたのだと思います。目に見える世界と、想像との境界を行き来することは、子供の頃から今も変わらずにしていることなのかなと思ったりしています。答えになっているのでしょうか？

藤野 こまったさんシリーズ、私も大好きでした。(こまったさんが料理、わかったさんがお菓子でしたね。)以前学校に勤めていた時に図書館で見つけて、大人になってから読んでみたら、一瞬で読み終わり「こんな短い話やったっけ？」となったのを覚えています。児童書だし文字が大きくて、ページ数も短いので大人が読めばそりゃ短く感じるのですが、子どもの頃は本の中の壮大な世界に自分自身が入り込んで、もっと長い時間軸に浸っていたのだと思います。自分の家がクリーニングの取次ぎ店だったので、最後に現実世界に戻るところは妙にリアリティがありました。(わかったさんはクリーニング屋さん。)

大人になった今も、ハリーポッターみたいなファンタジーより、軸が現実世界になっているSFなどがたまらなく好きです。甥っ子さんのエピソードも微笑ましく、私も甥っ子がいるので共感しました。四歳児にハッとさせられることは多いです。

### 小出 → 松元

小出 松元さんは、今回の出品作や過去作品においても、一貫してニュースで知る出来事やご自身の周りで起きたことを作品題材として扱ってこれていると思うのですが、無数にある中から、それらを題材として選択する時の基準について教えてください。

松元 一貫して言えるのは偶然見聞きしたものであるということ。感情移入が可能なものです。紙面やモニター越しの当事者に対して、自分自身に置き換えて考えてしまうところから制作をスタートさせます。何も知らない当事者以外の人間がその出来事について想う、語ることに興味があります。

小出 お返事ありがとうございました。私も過去作や現在制作している作品において自分以外の記憶や記録を扱うということをしているので、気になってお尋ねしてみました。そして、松元さんの出品作品を観ながら、「光のノスタルジア」という映画のことを思い出していました。あるひとつの場所に通い続ける人々が、それぞれの過去をそこで探し続けるというドキュメンタリーです。また機会があれば観てみてください。

### 松元 → 花岡

松元 タイトルについて。今回の作品は全て《無題》と称された後に括弧を使って、構成されるマテリアルや花岡さんの手で彫られたものの情報が記載されていますが、その中で「折れ」といった動作や状態を示すものが含まれていることが気になりました。タイトルに含む決め手となる条件などがあるのでしょうか？ 教えていただけますと幸いです。

花岡 作品にタイトルをつける時には、なるべく鑑賞者に先入観を与えないために作者の思いや感情を入れないようにしています。無題でも良いのですが、これは後から自分の作品をPCで整理する時に区別がつかなくなり面倒で、無題1とか無題2とするのもなんか味気ないので、最終的に無題(畳、衣服)のように素材を表記するようになりました。

無題なのにタイトルを付けてるような矛盾した感じが良いなと思っています。『折れ』に関しては素材ではなく現象を指していますが、作品を構成する要素としては大事な部分なので採用しました。

松元 情報を整理していく上で成り立っているタイトルだとは思ってもいなかったです。そこを含めて花岡さんと作品が共生しているような気がして、お伺いできて良かったと思いました。括弧の中にあるという距離感が心地よく、かえって(折れ)が際立って見えます。ありがとうございました。

## 日日の観察者

### 展覧会

会期：2020年10月24日(土)―2021年1月10日(日) 11:00-21:00

会場：HOTEL ANTEROOM KYOTO | Gallery 9.5

出品作家：小出麻代、花岡伸宏、藤野裕美子、松元 悠

主催：京都精華大学

グラフィックデザイン：芝野健太

企画：伊藤まゆみ(京都精華大学展示コミュニケーションセンター特任講師)

### ハンドアウト

編集・インタビュー：伊藤まゆみ

デザイン：芝野健太

発行日：2020年11月13日(金)